

「暮らしと水環境」の学習

宮城教育大学環境教育実践研究センター 村松 隆

1. 環境学習(教育)とは

「環境を学ぶ」、「環境を教える」ということはどのようなことだろうか。環境教育で、「環境の中の自分、自分とその周囲との関わり」を対象として取り上げ、目標は情操にあるということをししばしば耳にする。簡単で分かりやすい言葉だが、どれだけ「情操」の学習が進められているだろうか。

環境教育はある意味で「感性の学」、「感受性の学」であるが、その実践プロセスには次の3つの要素が含まれるはずである。

- 自然を感じ取る
- 自然と命との関係の実感
- 人と人のふれあい・会話

環境学習(教育)に自然は欠くことのできない対象である。社会や暮らしは自然を背景として組み立てられたものであるから、社会環境、生活環境の基盤となるものはやはり自然である。自然との関わり、自然の存在を実感することが環境学習の重要な要素であり視点であり、また行為である。自分と自然の間は「生命」で相互に関連づけられるから、自然の実感は、自然が育んだ尊い命の存在(の観察)を通して行われる。と は切り離せない。それらの学習過程で得た「感じ方」は、歴史を知る経験者との会話によってさらに深められ(強められ)、質的变化を伴い新たな発見(自発行為)へと進んでいく(ものでなければならない)。従って、は環境学習(教育)にとって必要な要素である。

このような考え方は、環境教育の根幹をなすもので、保全活動に向けた学習・教育の基盤をなすものである。環境教育では、この視点を常に見失わないよう慎重な「配慮」が必要とされる。この「配慮」は実践育プログラムに反映される。

多くの学校や地域社会の中で、環境に目を向けた取り組みが以前に増して活発化しているという印象をもつが、多くの人々の努力がどれだけ若い世代に感銘を与え、彼らの自発的保全活動を促してきたか、環境教育を主体的に取り組めば取り組むほど疑問に思う。

2. 水環境と環境学習

身近な河川や湖沼を環境学習(教育)のフィールドとし、水環境の仕組みや水中の生命に着目した取り組みが行われ

ている。その中で、この取り組み自体を環境学習(教育)であると錯覚することがある。例えば、「川の生きもの調査」、「水質調査」など、自然の姿を眺める取り組みは、いわゆる理科の学習プロセスである。そのような取り組みの中には、興味・関心・驚き、感動など、観察者の感受性を刺激する多くのものがあり、環境教育を進める上で役立つ要素が含まれる。しかし、環境実態の理解を目的とした教育は環境教育では無い。環境学習(教育)は、～に基づく保全活動の動機付けと可能な範囲での自発行為に目標を置くべきである。

「暮らしと自然」を主題とした環境の取り組みに、河川・湖沼などの水環境は、適した材料である。水は人や生きもの暮らしに密着しているから、命の受けた恩恵は測り知れないものがある。現代は水環境の汚染が保全に向けた取り組みの中心課題で、「水環境を(汚染から)守る」ための取り組みがいわゆる水環境保全活動であり、「人々の暮らしを守るために、人々から水環境を守る」立場での取り組みがよく行われている。結果として、「水環境を守るためには、我慢が必要だ」という安易で分かりやすい言葉が無責任に出てくる。地球環境の諸問題一般についても同様である。地球温暖化で「二酸化炭素の排出が問題だ。減らす努力や工夫が必要だ。その一つに、一般市民はエネルギーの節約に心がけよう」という表現がある。確かにその通りだと思う。でも、はたしてどれだけの人々がどれ程実践しているのだろうか。環境教育の必要性を強く感じる例の一つである。

3. 水環境を知る手がかり

水環境を知るものに「水質指標」というものがある。学校でパケットとしてよく取り上げられているCOD(化学的酸素要求量)はその代表例である。COD は有機汚濁指標の一つで、水が有機物で汚れている程度を指し示すもの(指標)と定義される。汚れが汚染に直結するという考えが基本にあって、保全の立場から水の質的悪化の程度を示すものとして解釈される。「こちらの水はCODが低値であるから汚染されておらず、魚がたくさん住んでいる」という具合である。これは必ずしも誤りでは無いが、適切な表現だとは思わない。有機汚濁指標という名称のもつ印象がそのような表現を導いたのだろう。国土交通省や市環境課の汚染状況の把握と改善対策等を目的とする取り組みに、“汚染指標や対策指標”としての有機汚濁指標の利用は理解できる。しかし、環境学習(教育)では必ずしも“汚染の指標”だけで無い。河川や湖沼の水環境では、周囲自然からの強い影響

を受け、豊かな生態系が築かれている。当然、人の影響も受けている。そのような水環境には、動物生態系を作り出すために必要不可欠な栄養化合物(有機物:主に腐植由来、小動物由来)が常時投入されていると見てよい。そこには自然の姿があり、目に見えない巧みで繊細な仕組みがある。食物連鎖、自浄作用などである。そのような水環境の仕組みを「見て感じる」ことが大事であって、見て感じるためのCODは、水環境の活動度の程度を示す指標であり、もはや有機汚濁指標としての意味は無い。上流に比べて下流のCODは大きい値になったとすれば、下流ほど多様な生態系が存在することになるし、上流～下流でCODが同じであれば、全流域で生きものにとって暮らしやすい環境が整っていることに気付くことになる。仙台を流れる広瀬川は概して「きれいな」河川である。広瀬川のような有名河川を教材として活用する場合は、特に、CODの意味の理解が必要である。

4. 最後に

豊かな暮らしの実現に私たちはどんなことができるのか。水中の小動物の暮らしを見守る気持ちを子ども達に持たせるためには、何が必要か。水環境との会話を通して教えられた「気づき」をどのように深めていくのか(深めさせるのか)、大人、特に、人生の歴史を知った大人(多分高齢者)の経験が大きな役割を果たすだろうと私は思う。子ども達を前にして、自らの経験談を語り、穏和で飾り気の無い論ず口調の説明に、子ども達が釘付けになったことは言うまでもない。傍で聴講していた私は、忘れかけていたあの頃の情景を匂いと共に思い出し、実に清々しく感じた。高齢者から受けた強烈な感情は、環境の教育や学習を進める上で最も大切なことである。

今、大学や学校などの職場で、若い先生が年輩の先生から教えられることが少なくなった。若い世代が高齢者から教えてもらおうと思わなくなった。高齢者のもつ知的財産を若い世代に伝える意義を今一度考えてみたいものである。